

【研究主題】 工業高校の特色を活かした地域貢献はどうあるべきか

【副題】 校訓「自律」を育む教育活動を模索して

秋田県立由利工業高等学校  
校長 金博之

## 1、はじめに

～本校の特色

本校は本荘由利地区唯一の工業高校として昭和37年に開校して以来、校訓「自律・創造・誠実」を教育理念に、「自律精神を基盤とし、全人教育を目指し、地域社会に貢献するとともに工業界の発展に寄与する人材の育成に努める」という教育目標を掲げてきた。卒業後は、地元地域に就職する割合が非常に高く、地域の企業や産業を支える工業技術者を輩出してきたと言える。

## 2、これまでの地域連携・貢献活動

### (1) 石脇西保育園との連携行事

～平成12年の運動会から始まった

平成の中頃から、石脇西保育園の園児が散歩がてらに本校運動会を見学しに来てくれていた。当時から地域との交流の必要性が叫ばれ、生徒会としても何らかの地域交流ができないか模索しているところであった。そこで、生徒会顧問と生徒会役員が話し合い、平成12年の運動会に正式に招待したいと考えた。石脇西保育園に打診したところ、こころよく応じてくれ、連携がスタートした。最初の年は「障害物競走」の 릴레이に参加してもらっただけだったが、そのうち本校生と園児と一緒に手をつなぎダンスを踊る種目も増えた。



写真1 今年度の運動会では園児がダンスを披露

このように、散歩のついでに運動会を見学しに来たことから始まった連携行事は、その後、七夕、ハロウィーン、由工祭（本校の学校祭）、別れの会（卒業生を送る会）等の連携行事となり、本校生徒会にとっても重要な活動の一つとなった。昨年度は、コロナ禍に

より残念ながらほとんどの連携行事を行うことはできなかったが、硬式野球部が秋の東北大会に出場する際には、園児からの応援メッセージをいただいたり、卒業式にはビデオメッセージをいただきダンスで卒業生を送り出してくれた。今年度は運動会に参加してくれ、手をつなぐ等の直接触れ合う種目はできなかったが、50m走と元気いっぱいのダンスを披露してくれた。このコロナ禍が収まり、少しずつ連携行事が復活してくれることを願ってやまない。

### (2) 電気技術ボランティア

本校電気科では2年生を対象に第二種電気工事の資格の全員合格を目標に取り組んでいる。平成16年度に、この資格を活かした社会貢献ができないかということで始まったのが「一人暮らしの高齢者宅技術ボランティア」である。学校所在地の石脇地区の高齢者宅を訪問し、分電盤の絶縁抵抗の測定、配線・灯具の目視点検、照明器具・灯具の清掃などをおこなっている。このボランティアは、毎年石脇地区民生委員の方々や本荘由利電気工事協同組合のご協力をいただいて実施している。

また、平成17年度からは、地域の保育園を訪問し同様のボランティアを行っている。



写真2 保育園での電気技術ボランティア

高齢者宅や保育園等でのボランティア体験をとおし、授業で学んだ電気工事に関することが実用に役立つことを経験するとともに、取得した国家資格を活かしたボランティア活動をとおして地域社会に貢献する意義を学ぶ機会となる。それ以上に、参加した生徒は、地域の高齢者や保育園児とのふれあいを持つことで、

相手に「感謝する、感謝される」という気持ちと思いやりの気持ちを感じる良い体験となっている。

### (3) 工業高校らしい地域貢献

ここ10年ほど、学校全体で、工業高校の特色を活かし地域に根ざした教育活動を重点目標にすえ、「地域に愛される由工」を合い言葉にさまざまな地域貢献活動に取り組んできた。建築科が課題研究で製作した物を寄贈したり、小学生を対象とした各学科の実験実習を体験する「ふれあい体験」や、前述の電気科技術ボランティアや車いす修理ボランティア等、工業高校の特色を活かした各種奉仕活動も連綿と引き継がれている。さらに、平成23年から地域防災の拠点として地域合同防災訓練の推進にも取り組んできた。工業高校の特色を活かしながら、由利工業高校らしい地域貢献を重ねてきたと言える。

## 3、「YUKOプロジェクト」班の設置

～令和元年 地域協働・地域連携へ

平成29年度、教育課程に航空機カリキュラムを導入するとともに、文部科学省のスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール(略称SPH)採択を目指し、地域との協働による高等学校教育改革推進事業として「地域人・先端人」YUKOプロジェクトを立ち上げ「地域との協働による探究的な学び」を計画した。残念ながらSPHには採択されなかったが、その時の計画を元に、平成31年度に地域協働推進委員会を設置した。生徒の活動としては、平成31年4月に、工業高校生ならではの視点を活かした地域貢献を目指して「YUKOプロジェクト」班を発足させた。位置づけとしては、既存の部活動であるロボット研究部の中に一時的に「YUKOプロジェクト」という名前の班を置き、本校の地域貢献の推進役となって欲しいと考えた。

部員は、由利本荘市観光振興課へ取材等をし、自分たちが暮らすこの地域で貢献できることはないか話し合いを重ねた。さらに、市内外の企業や工場を見学しながら活動を模索している中で、地域の主要観光施設として注目されていた「鳥海山 木のおもちゃ美術館」に着目した。美術館を360度見回せるVR動画(Virtual Reality バーチャルリアリティ)を制作し、木のおもちゃ美術館を疑似体験できる映像の制作に取り組むこととした。部員は、美術館の担当者と話し合いを持ち、制作にあたっては美術館への提案から撮影、

編集に至るまですべてを担当した。映像は、専用のゴーグルをスマートフォンと接続し、館内の廊下や教室の雰囲気疑似体験できる。画面は顔に合わせて360°動くため、臨場感のある映像を見ることができ、ゴーグルがなくてもパソコン等で平面画像を楽しむこともできる(鳥海山木のおもちゃ美術館ホームページに掲載中)。

動画完成後、令和元年11月29日に美術館を訪問し、贈呈式を行った。由利本荘市の美術館担当者には「高校生の視点で捉えた斬新な映像で、さらなる来館者の増加につながればいい」とのお言葉をいただいた。



写真3 VR映像(YouTubeからも視聴できる)

令和2年度には、地域防災をテーマに活動を進めた。前年度に制作したVR動画の制作技術を活かし、地域と連携した防災教育に取り組み、防災・減災への意識を高めようと企画した。由利本荘市の危機管理課を訪問し現状について学んだり、秋田県防災学習館でさまざまな体験をし、防災についての考えをまとめていった。その後、ハザードマップを利用して水害動画を作成した。この活動を通して、防災に対する意識は高まるとともに、より正確な防災VR動画を作ることの難しさに直面し、今後継続して取り組むこととした。その後、由利本荘市民まつりにブースを出展する機会を得て、これまで行ってきた「YUKOプロジェクト」班の活動を発表することができた。また、秋田県産業教育フェア秋田大会では、コロナ禍により例年とは違いリモートでの発表となり、映像で参加することができた。

3学期になり、由利高原鉄道が高校生の乗車率向上に向けてさまざまな取り組みをしていることを知り、地域の足である由利高原鉄道を何らかの形で応援することは本校にとっての地域貢献にふさわしいものだと考えた。そこで、次年度は由利高原鉄道との連携に取り組むことにし、由利本荘市で公募している「地域づくり推進事業補助金 新たな担い手・学生まちづく

り」に申請したところ、要望がとおり補助金を得ることができた。

#### 4、地域貢献部の発足

～令和3年「自律」を育む教育活動を模索して  
これまでさまざまな地域貢献活動をおこない、できるだけ生徒が主役になる活動を計画してきたが、外部団体と交渉することが多く、先生方が主導した形になってしまいがちであった。これまでの反省を踏まえながら、令和4年度の創立60周年に向けて地域とのつながりをより強固なものにし、「地域に愛される由工、地域とともに育つ由工」を目指したいと考えた。さらに、校訓「自律」を高めるため生徒会委員会活動が活発になってほしいと願いながら、地域貢献活動においても、生徒がより主体的に参加し企画から参加できるようにするためにはどうあるべきかと検討した。また、これまでの活動を通し、生徒の意識も高まり、本格的な活動を目指す気運が高まっていた。

そこで、令和3年度から「YUKOプロジェクト」班を正式な部活動とし、本格的な活動を行うこととした。部活動の名称を何にするか生徒に聞いたところ、これまでの対外的な活動経験から、部の目的がズバリわかる名称にしたいということで「地域貢献部」という部活動名に決まった。いわゆるボランティア活動にとどまらず、生徒が企画から参画できるような、より地域との連携・協働を意識した活動を目指すこととした。校訓「自律」を育む教育活動の一つとなってもらいたいとの願いもあった。

##### (1) 由利高原鉄道との連携活動

令和3年度、由利本荘市から助成金をいただき由利高原鉄道との連携を始めた。市に申請した事業目的には、「これまで私たちは、地域に貢献する工業高校生を目指してきた。その活動の中でVR技術を培ってきた。この技術を用いて地域資源（由利高原鉄道等）の発信を行うなど、工業高校生のアイデアや行動力により、若い世代への魅力の発信につなげ地域の活性化を図る。」とある。これまでの2年間の活動を通して得たVRの技術を活かし、由利高原鉄道の担当者と十分な協議を重ね一緒にあって由利高原鉄道の良さを情報発信していこうという意気込みである。

現在、由利高原鉄道「おぼこ号」に乗車し各駅を訪れ情報を得たり、由利高原鉄道経営戦略課の方々と様々な意見交換をするなど、生徒が主体となって企画・

運営し、完成に向けて頑張っている。これまで、動画



写真4 由利高原鉄道電車360°カメラにて撮影

素材を集め、編集している途中である。将来的には、矢島駅周辺マップの観光資源を撮影（360°カメラ静止画）し矢島街歩きマップにQRコードを紐付けたりしたいと考えている。

##### (2) 新山小学校との協働活動

今年度の活動としてもう一つ、本校の近くにある由利本荘市立新山小学校との連携・協働活動がある。

本校は最寄りの羽後本荘駅から約4km離れ、多くの生徒が自転車通学をしている。以前は狭い道路を自転車で通学し、苦情の電話を受けることも多かったが、交通量の少ない通学路を強く勧めたり（推奨通学路）、長年の交通安全指導により少しずつ改善している。しかし、依然として自転車のトラブルは発生しており交通安全の重要性は高い。そこで、近隣の新山小学校と協働で、通学路の安全確保に向けた取り組みができないかと考えた。部員は小学校に出向き、担当の先生と相談を重ねるとともに近くの由利本荘警察署石協交番の協力を得ながら進めることになった。



写真5 一緒に歩き、通学路の安全確認

初めに、小学生に交通安全に関するアンケートをとり、実際の通学路にある問題点をまとめ、動画撮影をしていった。現在、それらを編集し、VR動画にまとめているところである。できれば、VR動画を使って小学生に対して交通安全講習会を開いたり、新入児童が通学の疑似体験をすることで少しでも早く学校に慣れ、安全な通学をするための補助教材になったりすれば良いと考えている。この新山小学校との協働活動に

より、自分たちで発案から企画、そして小学校や警察署の方々と交渉するなど、多くの経験をする事ができた。



写真6 児童がVR撮影用カメラを装着し歩いた  
(ヘルメットの上にあるのがカメラ)

## 5、まとめ

地域貢献部の部員は、この半年間で由利高原鉄道や由利本荘警察署との協議、市への補助金申請など、さまざまなことを試行錯誤で行ってきた。ただ与えられたことをやるのではなく、自分たちで企画・実行する。その途中で、普段は接することがない人とも話し、交渉していくというかけがえない体験を積み、より現実的で実際に可能な活動を考えること等について学ぶことができたと思う。

これらの活動は、本校の校訓である「自律」を育むことにも通じると感じた。現在、地域貢献の重要性が叫ばれ、今では多くの学校が地域ボランティア等に活躍しているし、ボランティア活動の教育的意義はとても高い。反面、やや主体性に欠けるものになったり、行政や企業の下請けになっているとの批判もある。それらはボランティア活動そのものについての批判というものではなく、「やらされている」感覚、本来のボランティアの語源が持つものとの違和感から来るものだと考える。ボランティアでも、生徒がより主体的に参加でき、企画から運営について参画できるものがあれば良いのではないか。それを地域貢献部という部活動の中で実践し、学校全体へ良い影響を与え、生徒全員が、もともとのボランティアの発想に基づく貢献活動となってほしいと願っている。

本校では、これまでも工業高校の特色を活かしたボランティアや地域貢献活動を行ってきた。今後、これまで以上に「工業高校の特色を活かした地域貢献」「由利工業高校らしい地域貢献」、そして本校の校訓である「自律」を育むための教育活動を模索し、「地域に

愛され、地域とともに育つ由利工業高校」を達成させたい。その中核となるのが地域貢献部であり、この半年の彼らの活躍は十分期待に応えるものだと思う。

最後に、地域貢献部3年生部員の言葉を載せる。

「この三年間で沢山の経験をして多くの力を身につけた。特に大人の人たちと話し合いをしたり、活動内容を発表したりしたことが印象に残っている。これらの経験で誰かの前で話すことに自信が付き、部活動で得たことを社会に出てからも活かしたいと思う。」

「地域貢献部の活動の中で一番心に残っているのは、鳥海木のおもちゃ美術館のVR動画を制作したPR活動である。企画の提案から動画の編集までを自分たちで行ったため、とても貴重な経験を積むことができた。企画を提案することの大変さや部員と意見を出し合う大切さを学ぶことができた。」

「部活動を振り返って、様々な大会や行事に参加したり、大学生の研究やSPH（スーパープロフェッショナルハイスクール）の発表を聞くなど、貴重な体験を沢山できてとても楽しかった。この三年間で、企画を考えることの大変さやそれに必要な話し合い、目標を達成するまでに発生した課題の解決などを学ぶことができた。また動画編集技術やHTML言語の習得もすることもできて、技術面も成長することができた。」

「3年間を通して一番学んだことは、課題や問題をどのようにして解決するかだ。1年生の時は動画の編集やファイル転送などわからないことが多く、苦労した。やりたいことがうまく出来ないことが多かったが、試行錯誤してみても解決することができた。1年生のときが一番学ぶことが多かったと思う。」

## 6、終わりに

今年度、日本教育公務員弘済会秋田県支部様より「地域貢献賞」をいただいたことをきっかけに、これまでの本校の地域貢献活動をまとめ、地域貢献部を主にした地域との連携協働活動について報告させていただいた。本格的な地域貢献部の活動はまだ半年であり、今後より一層の活躍を期待している。

最後に、この小論を書くにあたって協力してくれた地域貢献部の3年生部員と顧問の鈴木鉄美教諭にこの場を借りて感謝します。今後も地域と連携・協働した活動を実践し、校訓である「自律」を育む教育活動を模索しながら、地域の一員としての役割を果たしていきたい。